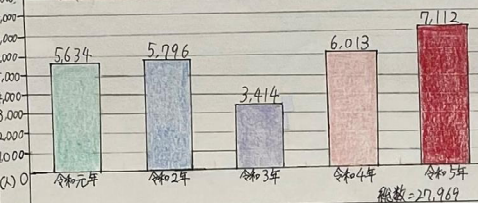


油断しない!! 熱中症の危険性

背景 近年、地球温暖化の影響で気温上昇が進んでおり、熱中症になる人が周りにも増え、身近に感じられました。そこで、熱中症はいつどんな時に、どんな人が起こりやすいのか調べ、気づいたこと、気になったことをまとめてみようと思いました。

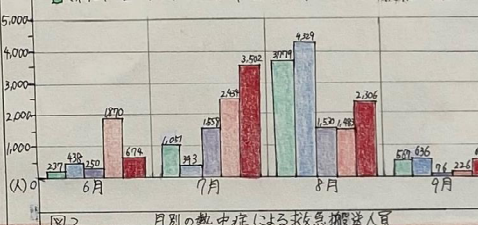
年、月別に見る熱中症による救急搬送人員数



年別の記録を見ると、令和五年の熱中症による救急搬送人員は過去五年間で7,112人と最大。令和四年から109人増加して35%増がわかりました。

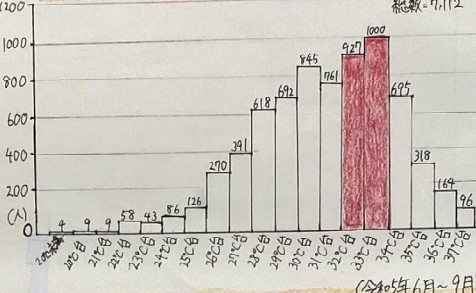
月別の記録を見ると、どの年でも7~8月が救急搬送人員が最も多く、危険であることがわかり、令和五年の7月が最も多く3,502人が救急搬送されました。

過去5年間の熱中症による救急搬送人員(年6~9月)



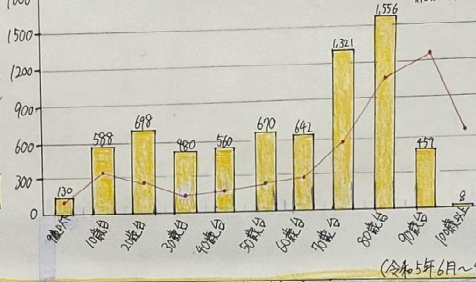
月別の熱中症による救急搬送人員

熱中症になりやすくなる気温の目安



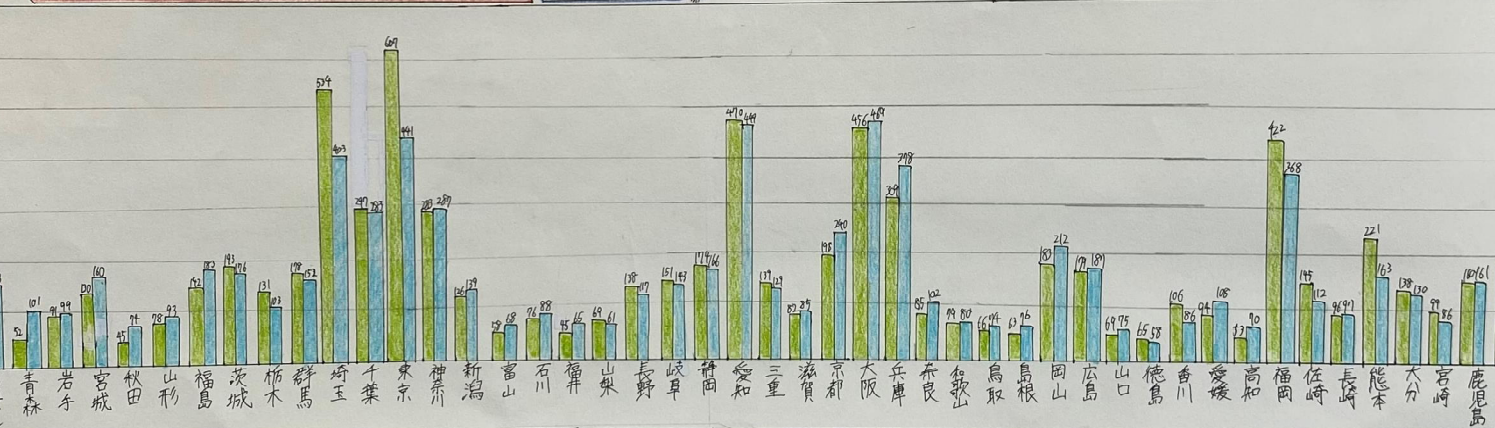
令和五年の救急搬送者数、7,112人の気温別を見た時のグラフです。そのうち約2,000人が32~33℃で救急搬送されています。そして28℃を越えたところで数字が増え、熱中症の危険度が高まっています。35℃が数字が低いのはおそらく、東京で猛暑日が観測された回数が少なかったからだと思います。(グラフは東京の記録)

年齢別 気をつけなければならない人は?



救急搬送人員数が一番多いのは70~80歳台が圧倒的に多く、10~60歳台は割合があまりありません。(万人あたり)で見ても、70~90歳台がかなり多く、高齢者が熱中症にかかりやすいことがよくわかります。

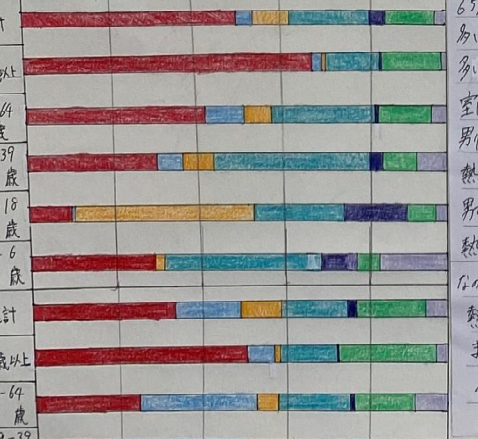
都道府県別 統計 グラフ



まず、目見て数が多い都市は、埼玉、東京、愛知、大阪、兵庫、福岡の6ヶ所。これらの都市の共通点はおそらく、大きな都会であることだと思います。都会である共通点から、熱中症の搬送者数が多いのは、ヒートアイランド現象だと予測します。ヒートアイランドとは、都市部の気温がその周辺の郊外部に比べて高温を示す現象です。(グラフは引用) 原因は主に、発展した土地の建造物や地面はコンクリートや鉄などでできており、

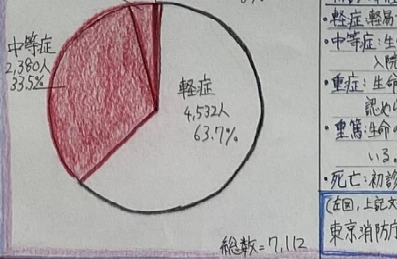
それらの大気加熱で空気がさらに熱されます。他にも人工物からの排熱などにより、都市化が進むほど気温は高くなり、熱中症の危険性も高まります。そして沖縄も令和6年の数が多いですが、沖縄は最南端の県なので、一年を通して気温が高いです。令和5年より、6年の方が搬送者の合計は減っていますが、他の都府県を比べると搬送者数が多いので、注意が必要です。

性別・年齢別 熱中症になりやすい場所は?



全体で見ると、男性女性とどっちも65歳以上、場所は住宅が一番多いです。発生場所に住宅が一番多いのは意外な結果だと思います。室内熱中症に気づきやすいと分かって、男性は職業の傾向から、作業中も熱中症の割合が高いです。そして男女比は7~18歳の子どもが運動中に熱中症になっています。小学生から高校生なので、体育の授業や、外での行事で熱中症になると予測できます。身近に起こるからこゝろ注意が必要です。

救急搬送時の初診時程度



軽症であれば、治るまでにかかる時間もなく症状も軽くすみやかに中等症以上に入院が必要になり、ひどくなると最悪の場合死に至ります。令和5年の救急搬送者数のうち、約4割の2,580人が中等症以上と診断されています。そして高齢者の約半数1,176人が中等症以上と診断されており、重症化しやすい傾向にあります。

熱中症の危険性~まとめ~

- 年々熱中症の患者は増えており、気温も高いと危険
- 高齢者を中心に熱中症に陥りやすく、身近に起こりやすい
- 熱中症になる前に重症化する前に対策することが大事

この統計グラフをまとめていく中で、様々な情報からやはり危険性が高まっている熱中症は身近に起こることであり、油断してはいけないなと思いました。熱中症にだけ対策は自分の知らぬ所にもあり、このグラフを通して皆さんにもっと対策してほしいなと思います。

【出典】
国立環境研究所
研究報告